

「家がいいね」 第86号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2011. 7. 6

節電のためなら熱中症も「わくくない」?

「健康のためなら死んでもいい」「こんなギャグがある。必死になりすぎると、そもそもその前提ですっかり忘れてる。ちょっと笑えない話です。在宅患者さんは、家の中でも脱水と発熱そして意識混濁を来たすことがある。熱に中(あた)る症状そのものである。以前は熱射病と言われたので、戸外だけの病気のように誤解されていました。体を冷却するシステムが高湿や多湿の条件下で働かず、水分や塩分が補充されずにいると、大事な脳がピンチに陥ります。クーラーは適度に温度と湿度を下げてくれるので、使い続けて欲しい。扇風機だけでは熱中症は防げない。健康を犠牲にしてまで節電をする意味はないはずだ。

みえ生と死を考える市民の会 講演会

6月18日当日は、雨にもかかわらず60名を超える参加者でした。一般市民の方々が大半を占め、当会の役割の大切さを実感いたしました。講師の垣添先生は、末期がんの愛妻を自宅に連れ帰り最期を看取った経験を、細かに話されて聴衆の共感を呼び起こされました。当日は、がん患者さんや家族そして遺族の参加も多数ありました。さらに、自らが悲しみに沈み、ようやく回復した経験から「医学は、死で失う事から始まる悲嘆にも、目を向けなければ本物ではない」と医療従事者にもメッセージを送っていただきました。病気としてのがんの闘病だけではなく、死別しても共に生きるためのグリーフケアの大切さを、市民の皆様全体に呼びかけられた、貴重な体験の時間でした。



試験が希望を生む お話

自閉症や学習障害を教えたいただける佐々木正美先生の三重での年1回の講演会があり、日曜に参加しました。



日本の子供達の瞳から生気が消えようとしている現状も語られ、豊かすぎ求めすぎて、親たちが子育てを苦痛に思っている問題を指摘されます。「希望はどこにあるのか」と6年前から岩手県釜石市を継続調査している「希望学」では、希望を持つ人は過去に挫折体験を持ち、それをくぐりぬけてきていることが見えてきました。希望は「棚からボタ餅」と待っているものではないのです。子供に希望を与えるためには、親が思い通りにしようとする「過干渉」を捨て、子供の立場への「過保護」をしなければいけない。親にとり大変だと思われるが、世の流れ今まで避けてきたと、子供の声を聴き続けた先生は言われます。「依存が足りてこそ自立が可能になる。子供より、まず親が試験に立ち向かわなければいけません」

「終りよければ」いせの会 講習会

定例開催：第2水曜 夜19時〜 参加無料
場 所：クリニック隣 縁(えに)の家
7月13日「今の世の葬儀」 講師と懇談も

「伊勢にホスピス!？」 市民公開講座

医療といのちと市民をむすぶ試みを知ろう
9月10日(土) 夜18時半〜20時半
伊勢市観光文化会館 参加無料
講師：金田亜可根さん(岡崎市民)



臨時外来休診

お盆休診は8月13日(土)〜15日(月) ご了承ください。


いせ在宅医療クリニック
自宅での人生を
最期まで支援します

